

# 26T-am01S

アトピー性皮膚炎モデルマウスにおけるプロポリスの抗搔痒効果および抗炎症効果の作用機序の解明

○李雪氷<sup>1</sup>, 茂木明日香<sup>1</sup>, 竹生田 淳<sup>1</sup>, 佐々木 崇志<sup>1</sup>, 井上 莉香<sup>1</sup>, 鈴木 登紀子<sup>1</sup>, 守屋 孝洋<sup>1</sup> (<sup>1</sup>東北大院薬)

アトピー性皮膚炎は、「炎症の増悪・寛解を繰り返す、搔痒のある湿疹を主病変とする疾患」であり、日本では小児を中心としてアトピー性皮膚炎の罹患者が増加しており社会的な問題となっている。一方、ヒトにおいてミツバチ産品のプロポリス製剤はアトピー性皮膚炎に対して予防効果を示すことが報告されている。そこで、本研究では、アトピー性皮膚炎モデルマウスであるNC/Ngaマウスを用い、その慢性アトピー性皮膚炎様症状に対してブラジル産プロポリスの経口摂取が予防効果を示すかどうかを搔痒行動、組織学的解析および生化学的解析等により明らかにすることを目的として検討を行った。

その結果、プロポリスの経口投与 (10, 100 mg/kg, twice/a week) は、ピクリン酸慢性塗布に伴う搔痒行動の発現、皮膚炎症スコアの上昇、表皮肥厚化、肥満細胞の浸潤に対して、ステロイド性抗炎症薬のプレドニゾン (3 mg/kg) と同程度に抑制作用を示した。さらに、プロポリスの経口投与 (1, 10 mg/kg) はピクリン酸塗布に伴う耳介肥厚化、特に表皮層の肥厚化、および肥満細胞の皮膚内浸潤などの急性炎症症状を用量依存的に抑制した。

以上の結果より、アトピー性皮膚炎モデルマウスNC/Ngaにおいて、プロポリスはハプテン刺激により搔痒行動ならびに皮膚炎症症状を抑制する作用をもつことが明らかとなった。